

第一日曜日
教会学校 9:00～
主日第一礼拝 9:00～
主日第二礼拝 10:30～

その他の日曜日
教会学校 9:00～
聖書を読む会 9:00～
主日礼拝 10:30～

日本基督教団 麻布南部坂教会月報

2018 (平成30年) 12. 9

牧師 松谷 祐二

〒106-0047 東京都港区南麻布4-5-6 Tel & Fax 03 (3473) 1276

E-mail church@nanbuzaka.com

http://www.nanbuzaka.com/

印刷 有限会社 創文社 Tel (3491) 8321

聖書と祈り会
毎週水曜日 10:30～
成人会
第3日曜日 礼拝後
婦人会
第4日曜日 礼拝後
教会附属 南部坂幼稚園

「まことの光の到来」

牧師 松谷 祐二

ヨハネによる福音書 第一章一～九節

初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった。この言は、初めに神と共にあった。万物は言によって成った。成ったもので、言によらずに成ったものは何一つなかった。言の内に命があった。命は人間を照らす光であった。光は暗闇の中で輝いている。暗闇は光を理解しなかった。神から遣わされた一人の人がいた。その名はヨハネである。彼は証しをするために来た。光について証しをするため、また、すべての人が彼によって信じるようになるためである。彼は光ではなく、光について証しをするために来た。その光は、まことの光で、世に来てすべての人を照らすのである。

(新共同訳聖書)

ヨハネによる福音書の書き出しは、初めて読んだときには戸惑わされるものです。謎めいた表現のオンパレードと言って良いでしょう。「初めに言があった」以降、続けざまに「言」が出てきます。この「言」とは、わたしたち人間の言葉、言語のことではありません。「神の言葉」のことです。旧約聖書「創世記」の冒頭、「神は言われた。『光あれ。』」こうして、光があった。——ちょうどこの「光あれ」のような、神の口から出る、神の言葉です。

旧約聖書において「神の言葉」は、それ自体が擬人化されて、神から派遣される神の代理人のようなイメージで描かれることがあります。旧約聖書的な想像力によれば、「神の言葉」は元々神のもとにいて、神とひとつですが、神が意思したこととを成し遂げるために、その口から遣わされて出かけていくのです。実際、「神の言葉」には、神の命、神の息吹が込められています。神の意思を成し遂げるための力があります。「神の言葉」は、

その力を發揮して、神が心に願ったことを、その通り、余すところなく現実と成らせていくのです。「神は言われた。『光あれ。』」こうして、光があった。ヨハネによる福音書は、「初めに言があった。言は神と共にあった」と、神の代理人のような「神の言葉」の存在と、その働きを書き連ねます。そうしながら、実はイエス・キリストのことを語っているのです。「イエス・キリストこそ、神の御心をすべて成し遂げる、生きた「神の言」である！」と。これは、「言」(原語はギリシャ語「ロゴス」という単語に無理矢理イエス・キリストを当てはめた、こじつけの解釈ではありません。この書物は最初から終わりまで、イエス・キリストのことを語りたのです。それが証拠に、この書物の締めくくりに近いところではこうも書いています。

これらのことが書かれたのは、あなたがたが、イエスは神の子メシア「注・メシアはキリストと同じ意味」であると信じるためであり、また、信じてイエスの名により命を受けるためである。

(第二〇章二節)

つまり、この福音書が言いたいのは、意識的に書きますと、こういうことです。

初めに「神の言」たるイエス・キリストがおられた。「神の言」たるイエス・キリストは神と共におられた。「神の言」たるイエス・キリストは神であった。この方こそが、初めに神と共におられた。万物は「神の言」たるこの方によって成った。創造されたもので、この方によらずに成ったもの、この方と無関係なもの何一つない。

「神の言」たるこの方の内にこそ、「神の命」があるのだった。この「神の命」を持つイエス・キリストこそが、人間にとつての「光」であった。この「光」は暗闇の中で輝くが、暗闇は光を理解しない。

そして、この「光」を指し示す証言者として洗

礼者ヨハネのことを手短かに述べてから、再度、この「光」なるイエス・キリストこそ、まことの光。ご自分のほうから世へとやって来て、すべての人を照らしたもう「光」である。

と、遠くから来てくださった「すべての人の光」「世の光」としてイエス・キリストを紹介していきます。キリストは、その父である神の意思を成し遂げるために、父のもとから遣わされて出で立ち、世にいられた方。「命」を持つ「神の言」。わざわざ来られたのは、世が「暗闇」であり、「光」に照らされるべきだからです。

「世」とは、わたしたち自身を別にした、漠然とした世間とか、暗い世情のことではありません。わたしたち自身を含めた世界全体が、「暗闇」であり、本当は「光」によって照らされる必要があるのに、それを自覚していない。「暗闇は光を理解しなかった」。そういう頑迷な暗闇の「世」と、わたしたちの方へと、「光」のほうから来られたのです。

クリスマスまでの四週間を、伝統的に教会の暦で「アドベント」と称します。アドヴェントゥスというラテン語で、単語の意味そのものは「到来」です。そこから、イエス・キリストの「到来」を待望する期間の意味にも用いられるようになったのでしよう。

クリスマスはキリストの誕生日、生誕の記念日、と言われます。ベツレヘムの家畜小屋で、マリアが産んだという面に注目すれば、キリストはわたしたち普通の人間のように「生まれた」と表現して良いわけです。しかしまた、キリストは、ヨハネによる福音書が証言するように、神のもとから「到来した」、「来られた」方なのです。

わたしたち自身がこの「到来」した「まことの光」に照らしていただいて、光を理解しない暗闇から脱すること、このイエスを神の子キリストと信じて、イエスの名により命を受けること、これがこそが、クリスマスの本当の目的であります。

子供達へのお話

(教会学校小学校の分級にて)

酒井 ユリ

私は約3年前から、麻布南部坂教会の礼拝に通い始め、6か月を経て洗礼を受けたという気持ちに至りました。そもそも私の自主的なキリスト教との関わりは、小学校低学年の時期が出発点です。当時、自宅近くの公園での野外礼拝に出ていて、皆で過ごすひとときを「楽しい」と感じ、とりわけ聖書のお話の世界に引き込まれていました。ただ、小学校4年生の夏に家を転居したことで、その礼拝から離れ、キリスト教との関わりは一旦途絶えてしまいました。

次に「礼拝に行く」と言う形でキリスト教に接したのは、冒頭のように今から約3年前です。とても長いブランクでしたが、聖書のお話を聞きたいという思いは持ち続けていました。その思いを、日曜日の午前中の過ごし方への迷いから「教会に行く」と言う行動に移せなかったことは今は残念でなりません。

しかし、転換期は突然訪れ、「とにかく一度教会に行って聖書に触れよう」と言う気持ちになり、それは不思議なほど自然な流れでした。そしてこの教会の日曜礼拝に出て、牧師・松谷先生のお説教を聞きましました。その中で、イエス様の御言葉の一つが今を生きる私たちに向けての御言葉であることを丁寧にわかりやすくお話しくださり、聖書を読むことが予想をはるかに超えて私にとって深い意味を含んでいると感じました。そうなるほど毎週礼拝に行くようになり、気付くと6カ月間ほとんど休まなかったことにイエス様からのお導きを感じて、受洗を希望する気持ちに繋がっていききました。

そして今思うことは、出来るだけたくさ

ん、繰り返しイエス様の御言葉を聞きたいということ。せっかく聞いた御言葉を忘れないようにするためです。そうすることで、その時々で聞いた御言葉のたとえ一言でも私の心の中に留まってくれる。それを繰り返し読めば私の心の中に留まる御言葉が少しずつでも増えてくる。これが「忘れない」ことになると思っています。ですから今後もしもイエス様の御言葉をたくさん繰り返し読んで聞こうと思っています。

初めて、ユキユキ、ゆも…

大司 宣子

十一月十七日、幼稚園に登園するときよりも、ちよつぱりおしゃべりした子供たちは、高齢者の方々がおられる広尾の慶福苑の入口に、お母さんと一緒に集まりました。幼稚園のさんびかをとのしむ会の慶福苑訪問は、今年で九年目になります。

今回は十組の母子の方々、千野先生、総勢二十五名で歌いました。年少さんが多く、お母さまも初めての参加の方がほとんどでした。

二つのフロアで、それぞれ5曲ずつ歌います。子供達は、園で歌っている曲を、初めての場所とは思えない大きな声で、元氣よく歌いました。

おばあちゃんたちは、微笑ましそうに眺めてくださったり、歌に合わせて膝の上で指揮をしたり、あるいは楽しそうに会話をしながら聴いてくださっていました。あとで、「讚美歌がなつかしかった」と言われた方もありました。

そして、いよいよ子供たちは自己紹介。あのような大勢の人の前で、自分の名前を言ったことは初めて、ドキドキだったかも知れませんが、好きな遊びは？の問いかけに「けいさつごっこ」「忍者」との答えもありました。

そして、次におばあちゃん、おじいちゃん

んたち、おひとりお一人にお母さんと一緒に折った折り紙の作品を手渡ししました。目を潤ませる方もありました。喜んで受け取ってくださったようです。さんびかの会に加わっておられない方も折ってくださったとか…皆の思いのこもったプレゼントを渡すことができたのではと思います。

短い時間ではありましたが、歌を通して、子供たちを通して、知らない方々と心を通わせることができたように思います。この喜びに感謝！

ひとりひとりのなをよんで あいしくくださるイエスさま
どんなにちいさなわたしでも、おぼえてくださるイエスさま (当日の歌から)

報告

*十一月四日(日)の主日第二礼拝は、「聖徒の日」の礼拝としてささげました。礼拝後、召天者記念愛餐会を行い、その中で特に、二〇一七年度に天に召された木村瑠璃子姉、細川本子姉、太田甫兄を偲びました。

*十一月十八日(日)の特別礼拝は、深井智朗先生(東洋英和女学院院長)に説教をしていただきました。

深井先生のプロフィール
一九六四年生まれ。アウグスブルグ大学哲学・社会学部博士課程修了。Dr. Phil (アウグスブルグ大学)、博士(文学)京都大学。聖学院大学教授、金城学院大学教授、東洋英和女子学院大学教授を経て、現在、東洋英和女子学院院长。

各部報告 十一月度

成人会

休会

婦人会

日時 十一月二十五日 主日礼拝後
場所 教会堂会議室
出席者 九名
開会祈祷 菊池才知子姉
閉会祈祷 全員順次小祈禱
内容
一、聖書研究
「サムエル記 上」 二章十二節〜四章一節

二章十二〜三十六節 祭司エリの息子たちは神に捧げるいけにえや捧げものを横取りするなど数々の不行跡を働き、父エリの論に耳を貸さずとなかった。天使が祭司エリのもとに神の言葉を伝えるに現れた。エリがイスラエルの神より息子たちを大事にして私腹を肥やしているゆえにもはや主の前を歩ませることはない。エリの息子二人は同じ日に死ぬ。主は主の心に叶う忠実な祭司を立てる。彼は生涯、主が油注いだイスラエルのリーダーの前を歩む。

三章一節〜四章一節まで ハンナの息子サムエルは祭司エリの下で主に仕えていた。主がサムエルを呼ばれた。エリはサムエルを呼んだのは主であると悟り、また、呼び掛けられたなら、「主よ、お話しください、僕は聞いております。」といいなさい、と教えた。サムエルが戻って寝ていた場所に主が来て立たれ、彼に言った。「エリに予告したとおりに神を汚す息子たちを放置しておいたエリの罪のため、エリの家をとこしえに裁く。」翌朝、サムエルはエリにお告げを伝えることを畏れたが、エリは神の言葉を隠さず話すようにといった。サムエルは成長し、全イスラエルの人々に預言者として信頼されるようになった。

次回一月二十七日「サムエル記 上」四章一節後半〜七章一節まで
二、その他打合せ 姉妹達にクリスマスカードの発送準備